第11回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった -登戸研究所掘り起こし運動30年のあゆみ-」記録 展示内容解説

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学平和教育登戸研究所資料館 公開日: 2021-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚本, 百合子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22082

明治大学平和教育登戸研究所資料館　館報
第７号　2021 年度
１－19 頁，2021 年９月

第 11 回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった —登戸研究所掘り起こし運動 30 年のあゆみ—」記録
展示内容解説

塚本百合子
明治大学平和教育登戸研究所資料館特別嘱託学芸員

はじめに

2020年に開館 10 周年を迎え，当館開館までのあゆみを今一度調査し記録することを目的とし，本稿の基となる第 11 回企画展を企画した。40 年近くにわたり川崎市民，高校生そして元登戸研究所勤務員とともに登戸研究所研究に携わってこられた渡辺賢二氏（当館展示専門部会委員）より登戸研究所勤務員の OB 会「登研会」資料の提供を受け，元登戸研究所勤務員自身の登戸研究所掘り起こし運動についても今回，光をあてることができた。また，明治大学に保管されていた登戸研究所に関する資料についても今回初めて調査を行い，当館が開館するまでのあゆみを大学資料からも紹介することができた。

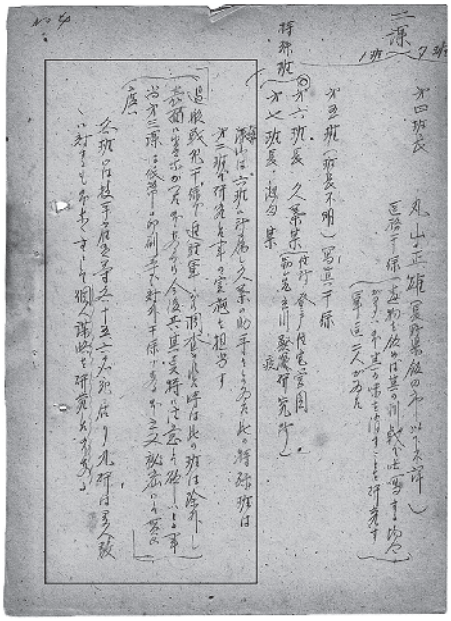
なお，ここで紹介している資料のほとんどが，登戸研究所資料館公式 Web サイトの「イベントの記録」で見ることができるので，特に文書資料はこちらもあわせてご参照いただきたい。

１．登研会の発足と「登戸研究所跡碑」建立

⑴　終戦とその後の元登戸研究所関係者

終戦となり，登戸研究所関係者も GHQ の訊問を受けた。帝銀事件『捜査手記』[1]（第１図）からは，いわゆる BC 級戦犯にあたる罪に問われることを恐れ，GHQ に第三科の活動（偽造紙幣謀略担当）と第二科第六班（風船爆弾に搭載する予定だった生物化学兵器研究開発担当）については証言していないと語る山田桜（第二科科長･技術大佐）の姿を認めることができる。しかし，元所員で戦争犯罪を問われたものはいなかった。なぜならば，米国と元所員の間には「ギブ・アンド・テイク」の関係が築かれ，1950 年頃より元所員の一部は米国の求めに応じ，米海軍横須賀基地内で米国の秘密戦に携わるようになったからである。戦犯にはならないこと

がわかった元所員らは，徐々に登戸研究所で培ってきた自身の研究成果や作戦の功績を世間に示すようになる。第１表に登戸研究所関係者の体験記などが掲載された雑誌･書籍一覧を示す。風船爆弾関係者や偽造謀略関係者は登戸研究所関係者の中では最も早い段階である 1950 年代には体験談などを発表している。戦犯に問われないことがわかったからである。まず, 1951（昭和 26）年初頭には風船爆弾開発協力者の一人である高田貞治が風船爆弾について詳細に雑誌『自然』で発表している。また，偽造紙幣謀略機関「阪田機関」の機関長だった阪田誠盛（さかたしげもり）は 1949 年に発生した密輸事件「海烈号事件」(2) で検挙され，米陸軍第八軍司令部による軍事裁判で禁固５年・罰金 5,000 ドルの判決が 1950 年６月に出るも (3)，1951 年 12 月には在日兵站司令部の「クリスマス恩赦」で釈放 (4) され, その１年後である 1952 年には「香港謀略団」（雑誌『話』10 月号，出版社不明）において自身の蔣介石政権との和平工作にまつわる謀略活動の功績を発表している。



朝山は〔第二科〕六班に所属し久葉の助手をしていた　此の特殊班は
第二班〔毒物合成等担当〕で研究した事の実施を担当す
「過般戦犯関係で進駐軍から調査された時は
此の班は除外し
表面は出さなかったのであるから今後共其点
特に注意して欲しいとの事
尚第三課〔科〕は紙幣の印刷等で対外関係があるので之又秘密にして貰い度い」

第１図　帝銀事件『捜査手記』別巻より山田桜供述箇所　1948（昭和 23）年４月 14 日帝銀事件捜査員作成。右は山田桜が刑事に話した内容より画像囲み部分を書き起こした。〔　〕内は著者補足事項。（帝銀事件再審弁護団所蔵）

第１表　「登研会」が発足するまでの登戸研究所関係者の体験記などが掲載された主な雑誌・書籍

年　代	内容	著者または取材対象者	旧所属
1951（昭和 26）年１月～３月	「風船爆弾」（雑誌『自然』，中央公論社）	高田貞治	風船爆弾開発協力者（第八陸軍技術研究所，少佐）
1951（昭和 26）年 12 月	「風船爆弾の気象学的原理」（雑誌『地学雑誌』60-4，中央公論社）	荒川秀俊	第一科嘱託（中央気象台）
1952（昭和 27）年 10 月	「香港謀略団」（雑誌『話』10 月号，出版社不明）	阪田誠盛	阪田機関長，偽造法幣流通の実務責任者
1956（昭和 31）年 12 月	「準備された秘密戦」（雑誌『週刊読売』臨時増刊号，読売新聞社）	岩畔豪雄	軍事課長，偽札工作（杉工作）の総責任者（少将）

1959（昭和34）年8月	「日本のスパイ廠第九技研：初めて明らかにする秘密新兵器の全貌」（雑誌『週刊現代』8月30日号，講談社）	取材対象者：草場季喜，八木秀次など	第一科科長（少将），風船爆弾開発の協力者（嘱託，気象台）
1961（昭和36）年11月	「風船爆弾　そのアイディアと威力のすべて」（雑誌『丸』11月号，潮書房）	草場季喜	第一科科長（少将）
1966（昭和41）年8月	「平和への戦い」（雑誌『文藝春秋』8月号，文藝春秋社）	岩畔豪雄	軍事課長，偽札工作（杉工作）の総責任者（少将）
1967（昭和42）年9月	「私は帝国陸軍で偽造紙幣を造った：日本最初の本格的な中国紙幣偽造秘話」（雑誌『現代』9月号，講談社）	高松繁	第三科中央班（当時の身分不明）
1975（昭和50）年1月	「日中戦争経済謀略」（機関誌『陸軍経理学校同窓会誌若松』新春号，若松会）	岡田芳政	松機関長，偽造法幣の流通責任者（大佐）
	「対支通貨謀略秘話」（機関誌『陸軍経理学校同窓会誌若松』新春号，若松会）	山本憲蔵	第三科科長（主計大佐）
1977（昭和52）年3月	「登戸研究所の秘密」（『陸戦兵器総覧』，日本兵器工業会）	篠田鐐 伴繁雄	登戸研究所所長（中将）第二科第一班班長（技術少佐）
1977（昭和52）年3月	「風船爆弾による米本土攻撃」（『陸戦兵器総覧』，日本兵器工業会）	草場季喜	第一科科長（少将）
1980（昭和55）年10月	「秘密兵器を作った登戸研究所」（雑誌『歴史と人物』10月号，中央公論社）	伴繁雄	第二科第一班班長（技術少佐）

⑵ 「登研会」が発足するまで

登戸研究所には研究所があった現・川崎市多摩区および周辺に居住する10代の若者が雇員・工員として多く雇用されていた。第2図が示すように，終戦直後の1946年の正月には，地域の元若手勤務員を中心に集まる機会があったことがわかる。こういった地域のつながりが基となり，1962（昭和37）年に第四科OBが中心となって第一回「登研第四科会」が開催される。これは元軍人を中心に結成された他の軍関係のOB会とは性質を異にし，地域の元若手勤務員が中心となって結成されたという特徴がみられる。

第2図　1946（昭和21）年正月に集まった元第三科北方班員　1946（昭和23）年1月撮影。

第四科は第二科と業務上密接なつながりがあったため，1963年には第二科と第四科合同で名簿が作成された。この第二科・第四科

会がのちの「登研会」の母体となる。

第三科については，1950年頃に元第三科員が「自然発生的に」集まり名簿の作成も行っていた[5]ようだが，米国の秘密戦に関わっていた「GPSO（政府印刷補給所）」員の大多数は三科会に出席することはなかった。

第３図　第一回登研四科会
1962（昭和37）年７月撮影。

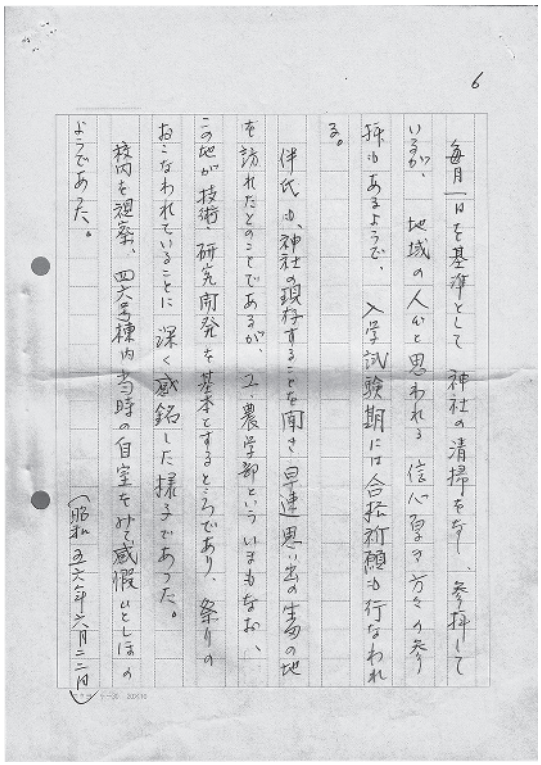
第２表　登研会が発足するまでのあゆみ

1946（昭和21）年	地域の元若手勤務員ら，正月に集まる
1950（昭和25）年頃	三科会が自然発生的に結成される
1961（昭和36）年	米国の秘密戦に携わっていた「GPSO」関係者，名簿作成
1962（昭和37）年	第一回登研第四科会
1963（昭和38）年	第二科と第四科OBの名簿作成
1982（昭和57）年	登研会発足

⑶　第二科および第三科の活動が公けになる

生物化学兵器，毒物謀略兵器開発の中心だった第二科の活動については，帝銀事件に関連したためジャーナリストによって紹介されることはあったが，第１表からもわかるように，元所員自らが語ることは長らくなかった。しかし，一つの転機が訪れる。

1980（昭和55）年10月，伴繁雄（第二科第一班長，技術少佐）が実名を出して，雑誌『歴史と人物』10月号（中央公論社）に第二科の活動を発表する。この記事を通じて登戸研究所に関心をもったNHKが，登戸研究所の取材を始める。この取材過程でNHKスタッフは伴に生田キャンパス内に登戸研究所の遺構がまだ残っていることを知らせる[6]。これを受け，伴は1981年６月，登戸研究所跡地である明治大学生田キャンパスを戦後初めて訪れた。その際に当時の明治大学生田校舎事務部長が残したメモが「生田神社の由来」（第４図）である。メモには伴と篠田鐐が中心となっ


6

毎月一日を基準として神社の清掃を行い、参拝している。地域の人々と思われる信心深い方々が参り拝むようで、入学試験期には合格祈願も行なわれる。

伴氏は、神社の現存することを南さ早速思い出の場の地を訪れたとのことであるが、工・農学部といいまもなく、この地が技術研究開発を基本とするところであり、祭りのおこなわれていることに深く感銘した様子であった。

校内も廻られ、四大学棟内当時の自室をみて感慨ひとしほのようであった。

（昭和五六年六月二二日）

第４図　生田神社の由来　1981（昭和56）年６月，明治大学生田校舎事務部長作成。（明治大学所蔵）

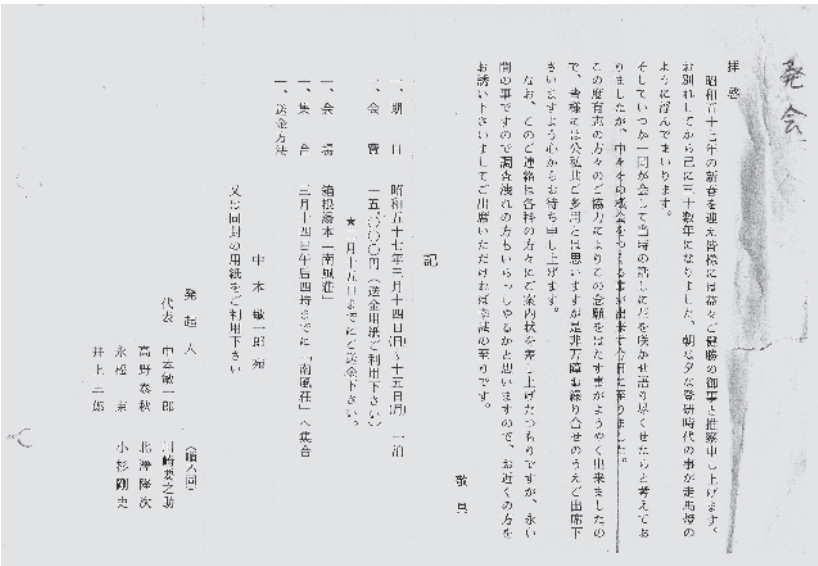
て建立した「弥心神社（現・生田神社）」が今も残り活用されていること，さらに伴が使っていた研究棟（44号棟）の自室も残っており，今も農学部の学生たちが研究棟として使用していることをみて「感慨ひとしほのようであった」と書かれている。

第５図　NHK「歴史への招待」取材で生田キャンパスを訪れた山本憲蔵　旧偽札印刷工場前で撮影された。1981（昭和56）年10月撮影。（狛江市所蔵）

また，同年10月には，これまで公けに一切偽造紙幣製造について語らなかった第三科長（大佐）の山本憲蔵が，責任者として初めてNHKの番組「歴史への招待」に出演し，その全貌を語る。番組では，山本は登戸に隣接する狛江市内に居住しながらも，戦後一度も登戸研究所跡地を訪れたことはなく，30年以上ぶりに足を踏み入れることについて「一回来たい来たいと思いつつ，もうチャンスはないと思っていた。感無量」と話す姿が印象深い。「極秘」とされていた第三科の活動を，責任者自らが公けに語る姿は，元所員らの心情に大きく影響したと考えられる。

⑷　「登研会」の発足と「登戸研究所跡碑」建立へ

戦後も登戸に居住していた第一科庶務班長（大尉）中本敏一郎，地元の元若手勤務員が呼びかけ人となり，1982（昭和57）年に初めて全ての科の元勤務員が集まる「登研会」が発足した。



発会

拝啓

昭和五十二年の新春を迎え皆様には益々ご健勝の御様子と拝察申し上げます。

お別れしてから已に三十数年になりました、朝な夕な登研時代の事が走馬燈のように浮んでまいります。

そしていつか一同が会して当時の懐しい話を肴に社会話り尽くせたらと考えておりましたが、中々その機会をもつことが出来ずに今日に至りました。

この度有志の方々のご協力によりこの念願をはたす事がようやく出来ましたので、毎年は公私共ご多用とは思いますが是非万障お繰り合せのうえご出席下さいますよう心からお待ち申し上げます。

なお、このご連絡に各科の方々にご案内状を差し上げたつもりですが、永い間の事ですので洩れの方もいらっしゃるかと思いますので、お近くの方をお誘いしてご出席いただければ幸甚の至りです。

敬具

記

一、期　日　昭和五十七年三月十四日(日)～十五日(月)　一泊

一、会　費　一五、〇〇〇円（送金用紙ご利用下さい）

★　月十五日までに送金下さい。

一、会　場　箱根湯本「南風荘」

一、集　合　三月十四日午后四時までに「南風荘」へ集合

一、送金方法　中本敏一郎宛

又は同封の用紙をご利用下さい

発起人　（箱入同）

代表　中本敏一郎　小崎敏之助

高野泰秋　北澤隆次

永堀　東　小杉剛史

井上二郎

第６図　第１回登研会案内状　1982（昭和57）年，登研会作成。（栗山武雄氏寄贈）

1982年3月に開催された第一回登研会では，交流を促進させるための名簿作成と「登戸研究所跡碑建立」が目指された。1988年3月23日付「〔登研会〕会報」には，「登戸研究所跡地へ記念碑建立の件」として「登戸研究所跡地は，現在明治大学生田校舎が建ち並び，あの登戸研究所の面影がまさに消え去らんとしております。この敷地の一隅に，大学の許可を得て石碑を建立し，「陸軍登戸研究所」名を遺留したいことと存じます」とあるが，跡碑

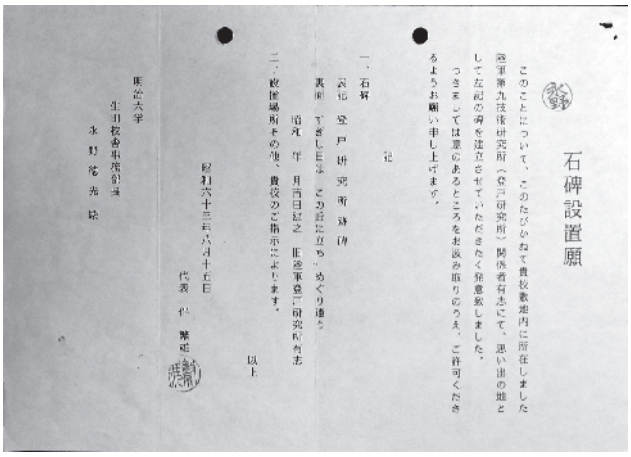
建立には伴の生田キャンパス来訪が影響したと考えられる。

第一回登研会後に建立のための寄付が呼びかけられ，当時の身分や男女関係なく85名の元所員，勤務者より寄付金がよせられ，1988年11月までに54万5百円が集まった。建立に際しての明治大学との交渉は伴が担い，弥心神社（現・生田神社）境内に跡碑を建立することが決定した。

第７図　登研会のようす　2003（平成15）年９月撮影。

碑文については，登戸研究所の功績を遺す①案と②案，そして積年の思いを句にこめた③案が提案された（第９図）。碑文の選定は，将校クラス（幹部）の一存ではなく全員の意見が反映されるよう，投票制とされた[7]。1988年に行われた投票結果は第10図のとおりである。②案と③案が同票だったため，この２つを組み合わせた現在の碑文が決定した（第11図）。

当時の身分に関係なく碑文が選ばれたことは，登研会の特色と言える。このような民主的な運営は他の旧日本軍関係のOB会ではみられないのではないだろうか。跡碑に刻まれた「過ぎし日は　この丘に立ち　めぐり逢う」という句[8]には「秘密を抱え込んだ人生から解放される喜び」が込められているという[9]。



石碑設置願

このことについて、このたびかねて貴校敷地内に所在しました陸軍第九技研究所（登戸研究所）関係者有志にて、思い出の地として左記の碑を建立させていただきたく発意致しました。

つきましては貴のあるところをお汲み取りのうえ、ご許可くださるようお願い申し上げます。

記

一、石碑

表記　登戸研究所跡碑

裏面　すぎし日は　この丘に立ち　めぐり逢う

昭和　年　月吉日記之　旧陸軍登戸研究所有志

二、設置場所その他、貴校のご指示によります。

以上

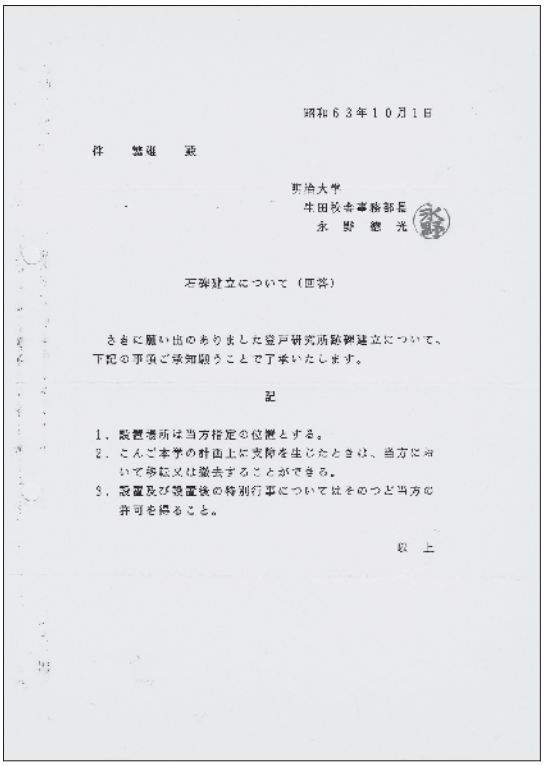
昭和六三年八月十五日

代表　伴　繁雄

明治大学

生田校舎事務部長

永野徳光　殿



昭和６３年１０月１日

伴　繁雄　殿

明治大学
生田校舎事務部長
永　野　徳　光

石碑建立について（回答）

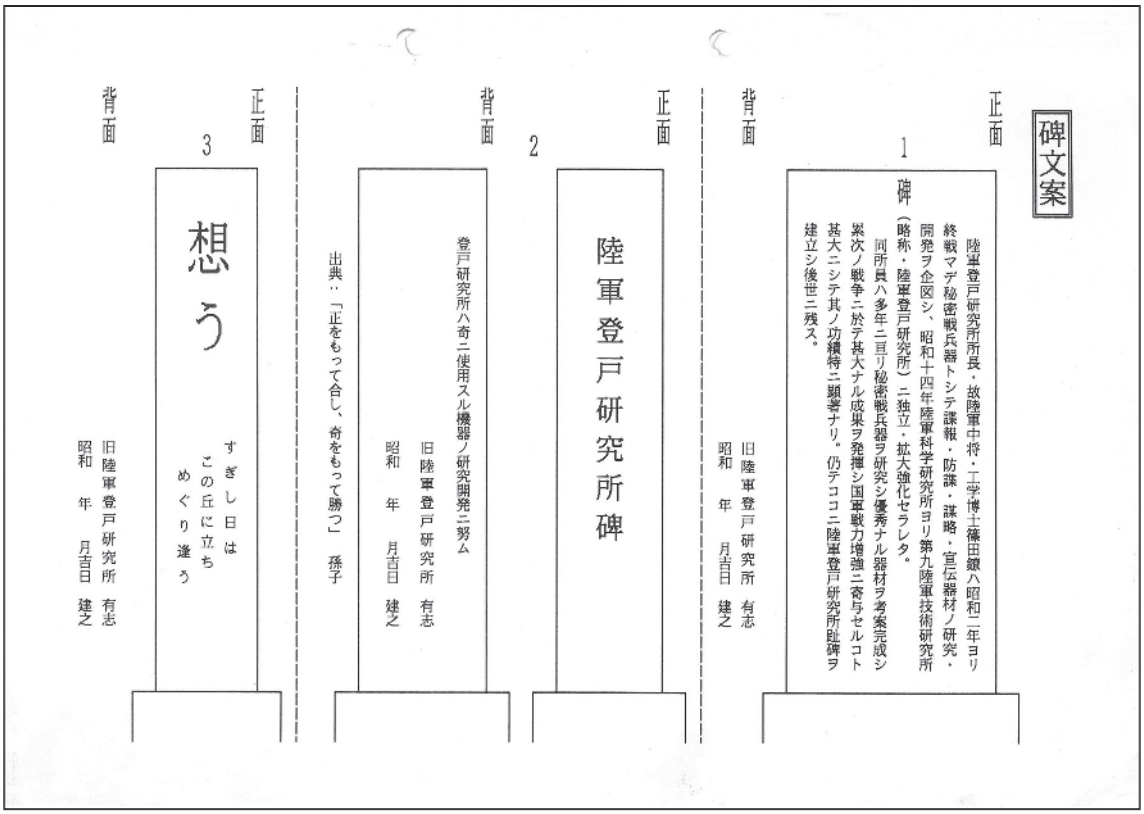
さきに願い出のありました登戸研究所跡碑建立について、下記の事項ご承知願うことで了承いたします。

記

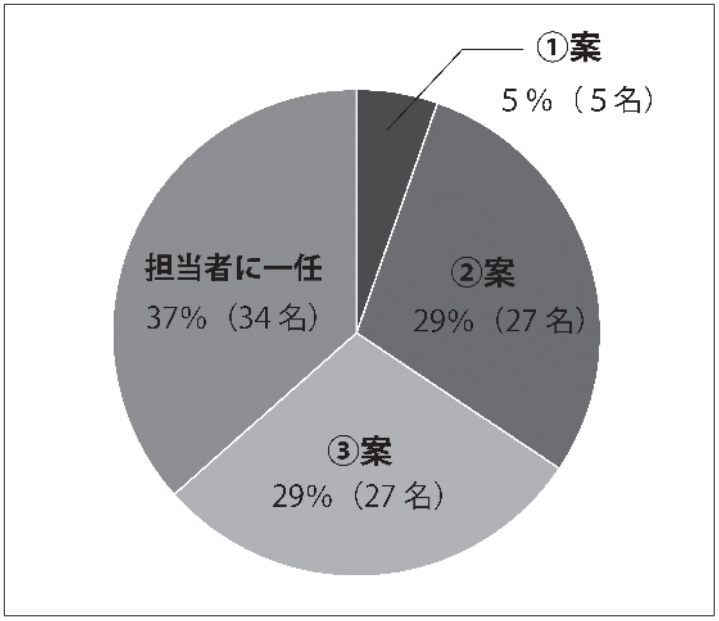
1．設置場所は当方指定の位置とする。
2．こんご本学の計画上に支障を生じたときは、当方において移転又は撤去することができる。
3．設置及び設置後の特別行事については、そのつど当方の許可を得ること。

以　上

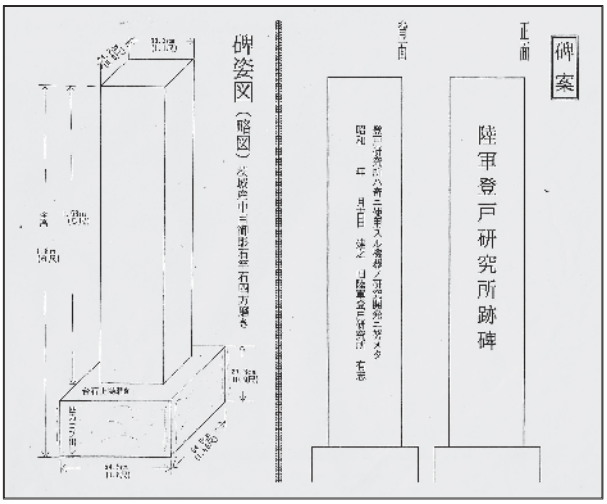
第８図　「石碑設置願」（左）　1988（昭和63）年８月15日，伴繁雄作成。（明治大学所蔵）
「石碑建立について（回答）」（右）　1988（昭和63）年10月１日，明治大学生田校舎事務部長作成。（渡辺賢二氏所蔵）



第９図　「碑文案」 1988（昭和 63）年，登研会作成。（渡辺賢二氏所蔵）



第 10 図　碑文選考投票結果
100 名にハガキが送付され，88 名の回答があった（複数回答あり）。回答無の 27 名は一任に含めた。（渡辺賢二氏所蔵「登研会ファイル」より筆者作成）



第 11 図　「碑案」 1988（昭和 63）年，登研会作成。（明治大学所蔵）

第 12 図　現在の跡碑　2020（令和２）年筆者撮影。

⑸　跡碑建立時期について

跡碑の裏面をみると「昭和六十三年十月建之」となっているが，実際に建てられたのは 1989（平成元）年 4 月だった。当時の登研会会長だった北澤隆次（元第四科技師）が跡碑揮毫者に宛てた書簡によると，昭和天皇の危篤が 1988 年 9 月に報道されたことにより，明治大学内の学生運動が活発化し事態が落ち着くまで建立を見送ったようである[10]。天皇崩御後も学生運動を刺激することを避け，大学の春休み期間中である 1989 年 4 月 4 日に据え付けが完了した。また，同年の 11 月 22 日には除幕式が執り行われた（第 13 図）。

第 13 図　跡碑除幕式　除幕しているのは伴繁雄。1989（平成元）年 11 月撮影。

2．「登戸研究所」掘り起こし運動

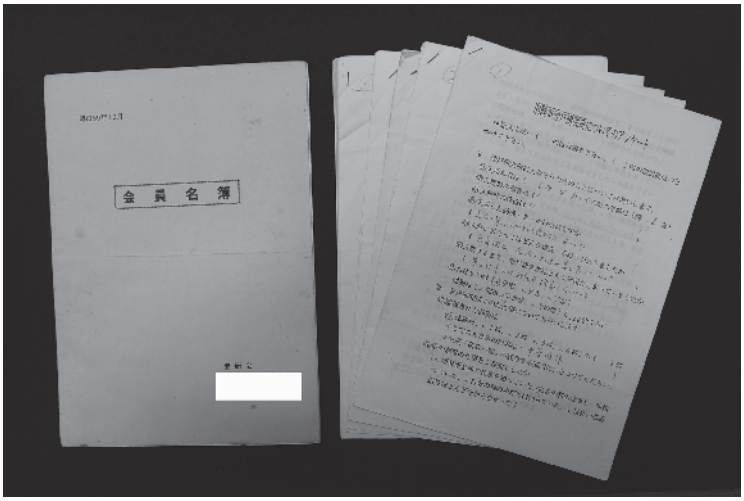
⑴　川崎市民による「登戸研究所」掘り起こし運動

川崎市民による登戸研究所記録活動として最も早い例は，郷土史家の角田（かくた）益信氏の写真記録である。角田氏は 1982（昭和 57）年より，生田キャンパス内外に残る登戸研究所遺構の写真記録を続けている。市民グループが登戸研究所跡地（現・生田キャンパス）を見学した最も早い例は，嶋村龍蔵氏が呼び掛けた 1987 年 8 月の川崎文化会議の見学会であろう。川崎文化会議のメンバーであり川崎市史編纂委員でもあった嶋村龍蔵氏は，市史編纂事業の過程で登戸研

究所を知り，伴繁雄や山本憲蔵も取材し『わが街川崎』第３号（川崎文化会議，1987 年）に「陸軍登戸研究所　秘密謀略戦の研究基地」を発表している。そして，後の高校生や元勤務員らの掘り起こし運動にも大きな影響を与えたのが 1987 年度より始まる「中原平和教育学級」の取り組みである。川崎市は全国の政令指定都市にさきがけ「核兵器廃絶平和都市宣言」を出し，1985 年には，行政が主導し市民自身が企画委員となって講座を運営する取り組み「平和教育学級」がスタートする。平和教育学級では市民の「地域の戦争の記憶を知りたい」という思いから，川崎市内各地で歴史の掘り起こし運動が展開された。その中で，前項で紹介した 1981 年放映の「歴史への招待」を見た中原平和教育学級メンバーが，地域にこのような歴史があったことに衝撃を受け，1987 年度の学習テーマに登戸研究所を選んだのである [11]。

1988 年２月には，中原平和教育学級主催で登戸研究所跡地見学会を開催した。多くの市民が集まる中，中原平和教育学級メンバー（以降，平和教育学級）は，元登戸研究所勤務員である井上三郎に出会う。井上から，「登研会」という登戸研究所 OB が集まる会があることを告げられた平和教育学級は，彼らへの聞き取り調査を申し出たが，この時は断られた。しかし，井上自身はその後も平和教育学級の聞き取り調査に応じ，井上と交流のある元登戸研究所勤務員を紹介した。平和教育学級は元勤務員と交流を重ねる中で，井上より「登研会名簿」を託される。名簿を確認すると，多摩区や麻生区など川崎市内にまだ多くの元登戸研究所勤務員が居住していることが判明した。そのため，平和教育学級に所属していた高校生メンバーの一人から，名簿を基にした川崎

第 14 図　中原平和教育学級で元勤務員と調査する市民
1988（昭和 53）年７月撮影。（個人蔵）



第 15 図　登研会名簿とアンケート

市内在住の元勤務員へのアンケートが提案され，川崎市教育委員会の協力の下アンケートが実施された（第 15 図）。その中で，当時の文書約 900 点が綴られた第一級資料『雑書綴』が提供されることとなった[12]。

⑵　長野と川崎の高校生による「登戸研究所」掘り起こし運動

平和教育学級のメンバーの一人であった渡辺賢二は，法政大学第二中学・高等学校（川崎市中原区）の教諭でもあった。1989（平成元）年，文化祭のテーマを生物化学兵器と決めた同校の高校生に，渡辺は登戸研究所のことを話した。「埋もれた過去の歴史を発掘するというだけでなく，それを研究することで，現代につながるものが見えてくるのではないか」と考えた高校生は，平和教育学級の市民と共に登戸研究所の掘り起こしをしていくこととなる[13]。

第 16 図　文化祭で発表する長野県赤穂高等学校生徒
1989（平成元）年平和ゼミナール撮影。

同じく 1989 年，登戸研究所の疎開先であった長野県駒ケ根市でも，長野県赤穂高等学校「平和ゼミナール」が文化祭の発表テーマを登戸研究所に決める。きっかけは平和ゼミナールのメンバーだった春日いづみさんが「地元の戦争の傷跡を知ってもらいたい」との思いからだった[14]。

平和ゼミナールの高校生たちは，駒ヶ根周辺に住んでいる元所員らを尋ね歩き，当初は話そうとしなかった元所員と人間関係を築いていく中で，登戸研究所の活動を明らかにしていく。それまで大人には会おうとしなかった伴繁雄も，高校生たちが自らの手で登戸研究所の活動を明らかにしたことを「よく調べた」と評価し[15]，自らの経験を彼らに語るようになる。

第 17 図　高校生の聞き取りに応じる伴繁雄
1989（平成元）年平和ゼミナール撮影。

二つの地域で始まった高校生による掘り起こし運動は同年 10 月には交流が行われ，1991 年には，両校の活動をまとめた『高校生が追う陸軍登戸研究所』（教育史料出版会）が刊行された。

⑶　元登戸研究所勤務者自身による「登戸研究所」掘り起こし運動

当初は親睦と跡碑建立を目的として開催されていた「登研会」だが，市民や高校生と関わる中で，自分自身が勤めた登戸研究所とはいったいどのようなところだったのか，自分たち自身で掘り起こそうという動きが地元の元若手勤務員を中心に広がる。

その中の一人，前述の井上三郎は『読売新聞』に次のように語っている。

「ずっとあの〔風船爆弾に〕細菌搭載のうわさが気になっていた。真相が知りたかった。
細菌搭載の計画はあったのか，中止した理由はなんなのか。
上司たちは何も語らないまま次々と死んでいく。登研会を作ったのには，旧交を温めるとともに，事実を後世にしっかり伝えるため，今みんなから聞いておかねばとの思いがあった[16]」

1995（平成７）年８月26日付『読売新聞』より。〔　〕内は著者補足。

元若手勤務員は自分が行った作業が一体何に使われたのか，作った器材がどこへ送られたのか一切知らされず，ひたすら仕事に打ち込んでいた。「極秘」とされていた登戸研究所の業務について，戦前はもちろん戦後も誰かに問うことや話すことは憚られた。井上の証言からは長年抱えてきた登戸研究所への複雑な思いが感じ取れる。

元勤務員自身により登戸研究所の掘り起こしが行われる中，伴は『中野校友会誌』（陸軍中野学校卒業生らの機関誌）より抜粋し，登戸研究所の活動の概要をまとめた『陸軍登戸研究所の思い出』を登研会で配布する。これは，当時は何もわからなかった若手勤務員たちに登戸研究所の全容を伝えるきっかけとなった。また伴は，登戸研究所の全容を後世に伝えるため，1988年より手記を執筆する。自身がわからない活動については登研会メンバーに原稿を募り『陸軍登戸研究所の真実』の原稿が1993（平成５）年に完成する。このような流れの中で，元勤務員も自身の体験を語るようになっていく[17]。

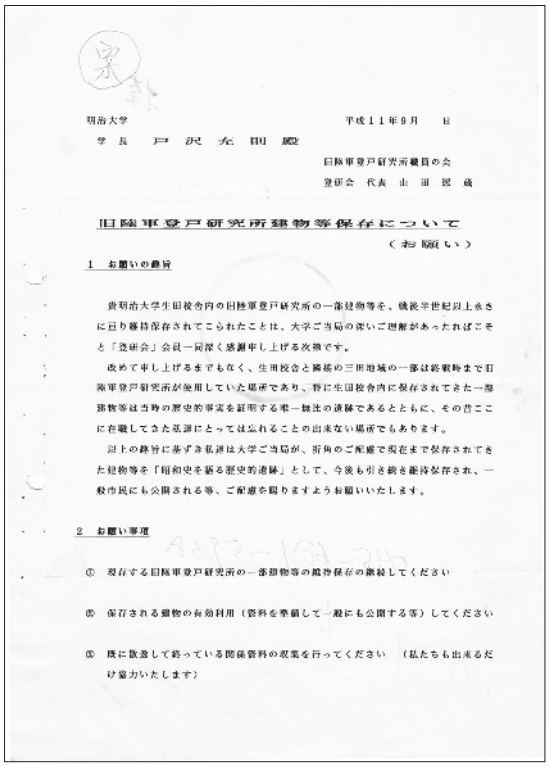
３．掘り起こし運動から保存運動へ

中原平和教育学級や高校生の掘り起こし運動によって，登戸研究所は多くのメディアでとりあげられ，市民の間にも関心が広がっていった。

1990（平成２）年，生田キャンパス内に残る旧登戸研究所本館の取り壊しが決定されたことから，登戸研究所遺構を保存しようという声が市民の中からあがり，同年に「旧陸軍登戸研究

所の建物を保存する市民の会」が発足，署名運動が展開され，12 月 14 日に登戸研究所遺構の保存を求める署名 3,339 名が川崎市議会に提出された。この請願を受け，1991 年，川崎市は旧登戸研究所本館の内外をビデオで撮影し，川崎市平和館に記録保存することを決定した。また，1991 年 6 月には，川崎市平和館への移築保存を求める請願書も提出された。

また，文化財保護基準の改正（1995 年）を受け，1998 年より実施される文化庁の「近代遺跡調査」において保存運動の盛り上がりもあり，登戸研究所遺構が調査対象となった。さらに，2002 年には国の文化財指定を念頭に入れた文化庁の全国戦争遺跡調査リストに登戸研究所が入り，文化庁による詳細調査も行われた。



明治大学　　平成１１年９月　日

学長　戸沢充則殿

旧陸軍登戸研究所職員の会
登研会　代表　山田愿蔵

旧陸軍登戸研究所建物等保存について

（お願い）

1　お願いの趣旨

貴明治大学生田校舎内の旧陸軍登戸研究所の一部建物等を、戦後半世紀以上永きに亘り継持保存されてこられたことは、大学ご当局の深いご理解があったればこそと「登研会」会員一同深く感謝申し上げる次第です。

改めて申し上げるまでもなく、生田校舎と隣接の三田地域の一部は終戦時まで旧陸軍登戸研究所が使用していた場所であり、特に生田校舎内に保存されてきた一部建物等は当時の歴史的事実を証明する唯一無比の遺跡であるとともに、その昔ここに在職してきた関係者にとっては忘れることの出来ない場所でもあります。

以上の趣旨に基ずき私達は大学ご当局が、折角のご配慮で現在まで保存されてきた建物等を「昭和史を語る歴史的遺跡」として、今後も引き続き維持保存され、一般市民にも公開される等、ご配慮を賜りますようお願いいたします。

2　お願い事項

①　現存する旧陸軍登戸研究所の一部建物等の維持保存の継続してください

②　保存される建物の有効利用（資料を整備して一般にも公開する等）してください

③　既に散逸して終っている関係資料の収集を行ってください　（私たちも出来るだけ協力いたします）

第 18 図　戸沢学長宛「旧陸軍登戸研究所建物等保存について（お願い）」 1999（平成 11 年）9 月，登研会会長山田愿蔵作成。登研会が戸沢学長に提出する予定だったもの。（渡辺賢二所蔵）

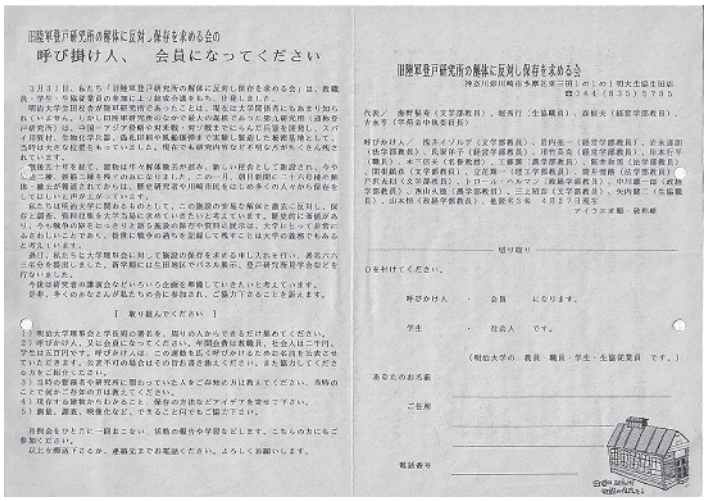
また，登戸研究所の掘り起こしを自分たち自身ではじめた登研会でも，明治大学内に残る登戸研究所遺構の保存と活用を望む声があがるようになる。1999 年 9 月に登研会は，当時の戸沢充則明治大学学長宛「旧陸軍登戸研究所建物等保存について（お願い）」を用意する（第 18 図）。この請願書では現存する登戸研究所遺構の維持保存，保存する建物は資料を整備し一般にも公開する等活用すること，既に散逸している関係資料の収集を訴えている。特に関係資料の収集については「私たちも出来るだけ協力いたします」とあり，これまで極秘とされてきた登戸研究所の活動について元勤務員自ら語り，資料も提供するという覚悟がみられる。しかしこの請願書は，学長が 2000 年に代わったため提出は見送られた。その理由の詳細は次章に記す。

4．明治大学平和教育登戸研究所資料館設立へ

⑴　明治大学内での保存運動と学術的研究のはじまり

1994（平成 6）年，明治大学は年度内の 26 号棟（第三科の倉庫）取り壊しを決定した。それを知った明治大学在学生，教職員らが「旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会」（以降，「保存を求める会」）を同年 3 月に結成，学内での保存運動を展開することとなる。これま

で川崎市に対する移築保存を求める運動が市民によって続けられてきたが，「保存を求める会」の運動は明治大学に保存を訴える初めての保存運動だった。


旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会の
呼び掛け人、　会員になってください

3月31日、私たち「旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会」は、教職員・学生・生協従業員の参加により結成総会を行い、計画した。
明治大学生田校舎が陸軍研究所であったことは、現在は大学関係者にもあまり知られていません。しかし旧陸軍研究所の全かで最大の規模であった第九研究班（通称登戸研究所）は、中国・アジア侵略の対米戦・対ソ戦までにふんだん兵器を提供し、スパイ用材、生物化学兵器、偽札印刷や風船爆弾まで実験し製造した秘密機関として、当時は大きな役割をもっていました。現在でも研究内容などが明らかがもくさん残されています。
一九九五十年を経て、建物は年々解体撤去が進み、新しい校舎として新設され、今年、二棟、新築二棟を残すのみになりました。この一月、朝日新聞に二十六号棟の解体・撤去が報道されてからは、歴史研究者や川崎市民をはじめ多くの人々から保存をしてほしいと声が上がっています。
私たちは明治大学に関わるものとして、この施設の安易な解体と撤去に反対し、保存と調査、資料収集を大学当局に求めていきたいと考えています。歴史的に価値があり、今も戦争の影をはっきりと語る施設の解体が貴重な資料を損なうのは、大学にとって非常におそれいることであり、戦後に戦争の過ちを記録して残すことは大学の義務でもあると考えています。
過日、私たちは大学理事会に対して施設の保存を求める申し入れを行い、高校六六三名を動員しました。教学部には生田地区でパネル展示、登戸研究所見学会などを行ないました。
今後は研究者の講演会などいろいろ企画を準備していきたいと考えています。
更年、多くのみなさんが私たちの会に参加され、ご協力下さることを訴えます。

［　取り組んでください　］

1）明治大学理事会と学長宛の署名を、周りの人からできるだけ集めてください。
2）呼びかけ人、又は会員になってください。年間会費は教職員、社会人は二千円、学生は五百円です。呼びかけ人は、この運動を広く呼びかけるために名前を公表させていただきます。公表不可の場合はその旨お書き添えください。また協力してください方をご相介ください。
3）当時の戦争と研究所に関わっていた人々ご存知の方は教えてください。当時のことで何かご存知の方は教えてください。
4）現在する建物からわかること、保存の方法などアイデアを寄せて下さい。
5）調査、調査、映像化など、できることは何でもご協力下さい。

月例会をひとたび一回おこない、活動の報告や学習をおこします。こちらの方にもご参加ください。
以上を御諒下さるか、連絡先までお電話ください。よろしく御願いします。

旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会
神奈川県川崎市多摩区東三田1の1明大生協生田店
☎044（935）5795

代表／　海野福寿（文学部教員）、越沢行（生協職員）、森恒夫（経営学部教員）、青木孝（学部委中核委員長）

呼びかけ人／　浅本イリルデ（文学部教員）、岩内亮一（経営学部教員）、佐藤通彦（法学部教員）、長家郁子（経営学部教員）、川竹英英（経営学部教員）、佐藤行平（職員）、木下因夫（名誉教授）、工藤潤（農学部教員）、飯澤和男（法学部教員）、関根直（文学部教員）、立花隆一（理工学部教員）、関根雅（法学部教員）、芦沢良紀（文学部教員）、ヒロコ・ハルマン（政経学部教員）、中川盛一郎（政経学部教員）、西田久雄（農学部教員）、三上昭彦（文学部教員）、矢内健二（生協職員）、山本恒（政経学部教員）、能勢栄5月　4月27日現在
アイウエオ順・敬称略

切り取り

○を付けてください。

呼びかけ人　・　会員　になります。

学生　・　社会人　です。

（明治大学の　教員・職員・学生・生協従業員　です。）

あなたのお名前

ご住所

電話番号

第19図　「旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会」チラシ
1994（平成6）年旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会作成。結成声明，呼びかけ人募集，講演会のチラシ。駿河台，和泉，生田各キャンパスで配布された。（明治大学所蔵）

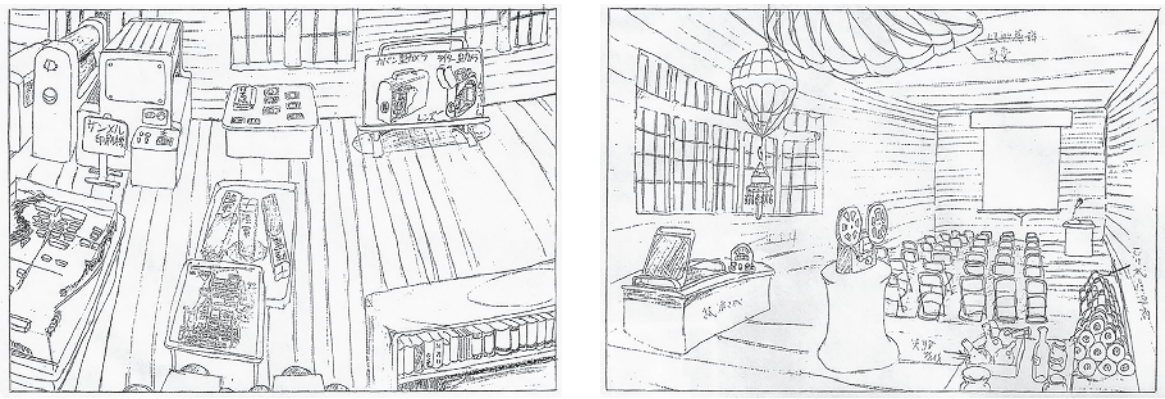
学内での保存運動が展開される中で，学術研究として登戸研究所を検証する重要性を感じた海野福寿（当時明治大学文学部教授，保存を求める会共同代表），森恒夫（当時経営学部教授，保存を求める会共同代表）ら明治大学教員と渡辺賢二は，明治大学人文科学研究所の総合研究として登戸研究所を取り上げることを決め，1994年に採択され，1995年度から3年度間，初めて組織的な学術調査が行われることとなった。また，この研究採択を受け，明治大学としてもすでに決定していた26号棟など旧登戸研究所遺構の取り壊しを調査研究のため3年間凍結することを表明した。この調査研究の成果は第3表に記す。

第3表　人文科学研究所総合研究「旧陸軍登戸研究所の総合的研究―十五年戦争におけるその意義」の主な研究成果

写真家・吉田一法氏に依頼し，生田キャンパス，疎開先である長野県・福井県・兵庫県，人体実験を行った南京病院，阪田機関本部（上海）を取材およびスライド記録を作成。
元所員の証言を基に第三科疎開先である福井県武生および粟田部を調査。登戸研究所「北陸分廠」として接収した加藤製紙・西野製紙を調査し，疎開先での第三科の活動を明らかにした。
疎開先である兵庫県小川村を調査。「関西分廠」の活動を明らかにした。
元所員の証言を基に，終戦直後登戸研究所から寄贈された「登戸研究所」蔵書印がある書籍約1,000冊を静岡大学にて発見。
『雑書綴』復刻。（第三展示室に展示中）
研究成果をまとめた『陸軍登戸研究所』（青木書店，2003年）刊行。

(2)　登戸研究所跡地の保存・活用の兆しと凍結

人文科学研究所の研究成果により，登戸研究所が歴史的に重要であると学術的に示されたこともあり，当時の戸沢充則学長（文学部教授）は，登戸研究所跡地を大学として保存し活用すると表明する。これに基づき，1999（平成11）年4月には，学長の下に「登戸研究所跡地の保存及び活用に関する検討委員会」が発足する。この中で5号棟（偽造法幣印刷工場）・36号棟（生物化学兵器研究棟，現・資料館建物）を展示資料館と平和教育の場として活用することが模索され（第20図），明治大学創立120周年にあたる2001年に展示施設およびモニュメントを設立することが決定された。



第 20 図　「登戸研究所資料館」展示イメージ図
1999 年に発足した「登戸研究所跡地の保存及び活用に関する検討委員会」で出された 5 号棟および 36 号棟を活用した展示案。1999（平成 11）年 9 月，森恒夫作成。（明治大学所蔵）

しかし，学内では学生運動が激化し，明治大学は正常な大学運営ができない状態に陥っていた。これを問題視した大学は「明治大学完全正常化」に全力を挙げることを表明する。登戸研究所保存運動を行う一部が学生運動に関係していたことから，2000 年，新たに就任した山田雄一学長（経営学部教授）により，登戸研究所に関するすべての保存と活用方法が凍結されることとなった。

第 21 図　ミニ展示室の案内　2000（平成 12）年撮影。（明治大学所蔵）

登研会では上記検討委員会の発足をうけ，戸沢学長に提出すべく前述の保存と活用の請願書を用意していたが，大学の保存方針が変わったことから提出することは叶わなかった。

大学内で登戸研究所遺構の保存と活用が凍結されている間にも「保存を求める会」は，5 号棟の一部に「登戸研究所ミニ展示室」を独自に設置（第 21 図），元勤務員を講師に迎えた講演会を開催するなど保存・活用の運動を続けたが，大学として正式な取り組みが成されることはなかった。

⑶　明治大学平和教育登戸研究所資料館設立へ

2004（平成 16）年，新たに就任した納谷廣美学長（法学部教授）により明治大学における平和教育の柱として，登戸研究所遺構の保存と展示活用が打ち出され，4 年間凍結されていた保存と活用問題がようやく動き出すこととなる。2005 年春，大学は和田一夫（元登戸研究所

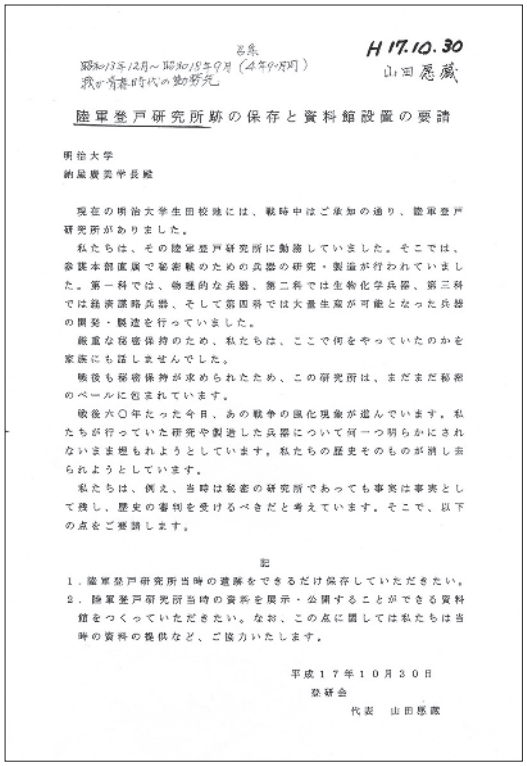
所員，登研会事務局長），長年登戸研究所研究に第一線でかかわってきた渡辺賢二，元明治大学教員である海野福寿・森恒夫と登戸研究所遺構の保存と活用についての話し合いの場を設ける。その中で登研会を代表して和田より以下の訴えが出される。

「登研会より保存要求の嘆願書を預かっているが，登研会会長の山田愿蔵さんはもう90歳であるし，会員も歳をとり残り少なくなっているので，早く処置をしないと貴重な資料が散逸してしまうと危惧している」

（明治大学所蔵「懇親会メモ」より）

この懇親会の内容は，同年10月に開催された登研会でも共有された。その中で，登戸研究所で行われた非人道的な研究や実験を繰り返してはいけない，後世の人たちには自分たちと同じ思いをして欲しくないという元勤務員たちの強い訴えが再度確認され，納谷学長宛に「旧陸軍登戸研究所建物等保存について（お願い）」（第22図）を提出した。

これを受けた大学は，2006年7月に「登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）の設置に関する検討委員会要綱」を制定，同年9月に第一回検討委員会が開催され，具体的に登戸研究所遺構の保存と展示施設設立に動き出した。



H 17.10.30
山田愿蔵

陸軍登戸研究所跡の保存と資料館設置の要請

明治大学
納谷廣美学長殿

現在の明治大学生田校地には、戦時中はご承知の通り、陸軍登戸研究所がありました。

私たちは、その陸軍登戸研究所に勤務していました。そこでは、参謀本部直属で秘密戦のための兵器の研究・製造が行われていました。第一科では、物理的な兵器、第二科では生物化学兵器、第三科では経済謀略兵器、そして第四科では大量生産が可能となった兵器の開発・製造を行っていました。

厳重な秘密保持のため、私たちは、ここで何をやっていたのかを家族にも話しませんでした。

戦後も秘密保持が求められたため、この研究所は、まだまだ秘密のベールに包まれています。

敗戦六〇年たった今日、あの戦争の風化現象が進んでいます。私たちが行っていた研究や製造した兵器について何一つ明らかにされないまま埋もれようとしています。私たちの歴史そのものが消し去られようとしています。

私たちは、例え、当時は秘密の研究所であっても事実は事実として残し、歴史の審判を受けるべきだと考えています。そこで、以下の点をご提案します。

記

1．陸軍登戸研究所当時の遺跡をできるだけ保存していただきたい。
2．陸軍登戸研究所当時の資料を展示・公開することができる資料館をつくっていただきたい。なお、この点に関しては私たちは当時の資料の提供など、ご協力いたします。

平成１７年１０月２０日
登研会
代表　山田愿蔵

第22図　納谷学長宛「旧陸軍登戸研究所建物等保存について（お願い）」 2005（平成17）年10月30日，登研会会長山田愿蔵作成。

また，中原平和教育学級から継続して，川崎市では何度も登戸研究所の学習が取り上げられ，市民の登戸研究所掘り起こし運動が市域に広がっていく。そうした中で，受講生らによって2006年に「旧陸軍登戸研究所の保存を求める川崎市民の会（現・登戸研究所保存の会）」が結成され，2007年1月には5号棟の移築保存と資料館設立に対し川崎市も明治大学を援助するよう署名活動を開始し，集まった9803筆とともに市議会へ請願書を提出する。この請願書を受け，26号棟解体（2008年），5号棟解体（2011年）どちらの際にも調査を行い，部材の一部を保存し当館に展示している。

こうして多くの人々の思いを受け，2010年3月29日に明治大学平和教育登戸研究所資料館は開館した。

おわりに

残念ながら登研会会長の山田愿蔵さんは当館開館前に逝去され，開館を見届けていただくことは叶わなかった。しかし，オープニングセレモニー当日には多くの登研会メンバーの皆様にご参加いただき，当館は無事に開館することができた。その後も，当館の開館を知った元勤務員の方が多く来館されている。自ら元勤務員だと語ってくださる方もいる一方，こちらからお声がけして元勤務員だとわかる方もいた。中には初めて登戸研究所のことを人に話すという方もいらっしゃった。話そうと思ったきっかけは，これまで誰にも話してこなかった内容が，資料館に展示され公開されている，もう話しても良いのだという思いをもったからとのことだ。

また，30 年前，登戸研究所の疎開先である長野県駒ケ根市において掘り起こし運動を率いた高校生，北原いづみさんが 2019 年，若くしてご逝去された。北原さんが元所員と人間関係を結んだことによって，「大人の誰にも話したくないが，君たち高校生には話そう」と人体実験や毒物兵器の製造といった重い事実を元所員は語るようになった。近年では駒ヶ根市でも登戸研究所の掘り起こし運動が再開され，市民や高校生が「登戸研究所調査研究会」を 2018 年に発足し，北原さんも世話人として活躍されていた中でのことだった。心よりご冥福をお祈りいたします。

多くの市民，そして元登戸研究所勤務員の「二度と登戸研究所で行われたことを繰り返してはいけない」という強い思いを受け取り，当館では登戸研究所の調査研究を進めていくとともに，その成果を社会の平和教育・歴史教育・科学教育に活用していただけるよう，これからも邁進していく。

謝辞

本稿を執筆するにあたり，下記のみなさまにご協力いただきました。ここに記し，感謝の意を表します。（敬称略・五十音順）

稲田郷土史会／狛江市／帝銀事件再審弁護団／登戸研究所調査研究会／

登戸研究所保存の会／毎日新聞社

〔注〕

（1）帝銀事件とは 1948（昭和 23）年 1 月 26 日に発生した集団毒殺銀行強盗事件。使用された毒物が登戸研究所で研

究開発された特殊毒物ではないかと疑われ，元登戸研究所員の多くが事情聴取を受けた。『捜査手記』は，捜査の主任刑事・甲斐文助が残した捜査会議メモ。詳細は『明治大学平和教育登戸研究所資料館　館報』第５号（明治大学平和教育登戸研究所資料館，2019 年）を参照されたい。

（２）海烈号事件とは 1949（昭和 24）年８月 17 日に横浜港にて発生した密輸事件。阪田誠盛, 元阪田機関員の板垣清，5・15 事件にも参加した三上卓ら計６名が共謀し，中国（台湾）国営の招商局所属船「海烈号」にてペニシリンなど薬剤品約５億円分を中国（台湾）から密輸しようとしていた。

（３）1950 年６月９日付『毎日新聞』朝刊２面記事より。

（４）1951 年 12 月 24 日付『毎日新聞』朝刊３面記事より。

（５）1972 年 12 月 10 日付第三科会会員名簿送付状より（資料 No.1936-002）。

（６）「生田神社の由来」（明治大学生田庶務課長作成，1981 年）１枚目。

（７）昭和 63 年４月 20 日付「登研会会報」によると，本来であれば第４回登研会において碑文を決定する予定だったが，当日協議する時間が足りず，後日ハガキによる投票制となった。選考会には伴繁雄（技術少佐），杉田正三美（下士官），永松束一（下士官），北澤隆次（技師）の他，雇員・工員の元若手勤務員４名（うち女性は２名）と当時の身分不明者１名が参加した。選考会への参加は登研会会員全員へ呼びかけられており，当時の身分に関係なく碑文が決定されたことがこの点によってもわかる。

（８）この句を詠んだのは登研会事務局の杉田正三美（下士官）だと登研会世話人の一人でもあった横山サト子（雇員）は語っている（2011 年１月 19 日資料館聞き取りより）。

（９）渡辺賢二「陸軍登戸研究所の実相をみつめて」（歴史科学協議会編集『歴史評論』2014 年８月号, 校倉書房）p.45。

（10）『北澤隆次追悼集』より（資料 No.270）。

（11）Love & Peace K30 川崎市教育委員会，川崎市高津市民館『川崎市平和・人権学習 30 年の歩み―1985 年～ 2014 年の記録―』（Love & Peace K30 川崎市教育委員会，川崎市高津市民館，2017 年）。

（12）『雑書綴』については 2018 年度企画展「少女が残した登戸研究所の記録―陸軍登戸出張所開設 80 年―」および『明治大学平和教育登戸研究所資料館　館報』第６号（明治大学平和教育登戸研究所資料館, 2020 年）を参照されたい。

（13）長野･赤穂高校平和ゼミナール，神奈川･法政二高平和研究会『高校生が追う陸軍登戸研究所』（教育史料出版会，1991 年）p.143。

（14）同上 p.13。

（15）1989 年８月赤穂高校平和ゼミナール撮影伴繁雄インタビュー映像より（木下健蔵氏提供）。

（16）井上三郎は第四科に所属し，風船爆弾打ち上げを担当していた。

（17）和田一夫（第一科工員）は 1994 年に自伝『昭和とともに生きて（わが人生の足跡）』を刊行，川崎要之助（第四科憲兵器材担当）は 1997 年～ 2001 年にかけて多摩区で活動する稲田郷土史会機関誌『あゆたか』第 35 ～ 39 号に登戸研究所についての記録を発表した。

〔参考文献〕（著者名五十音順）

稲田郷土史会『あゆたか』第 35 号～第 39 号（稲田郷土史会，1997 ～ 2001 年）

海野福寿，山田朗，渡辺賢二『陸軍登戸研究所　隠蔽された謀略秘密兵器開発』（青木書店，2003 年）

川崎市中原平和教育学級編『私の街から戦争が見えた　謀略秘密基地登戸研究所の謎を追う』
（教育史料出版会，1989 年）

斎藤充功『謀略戦　―ドキュメント陸軍登戸研究所』（時事通信社，1987 年）

鈴井正敏「キャンパスの正常化」
（明治大学経営学部人文科学研究室『人文科学論集』第 58 号，明治大学経営学部人文科学研究室，2012 年）

長野・赤穂高校平和ゼミナール，神奈川・法政二高平和研究会『高校生が追う陸軍登戸研究所』
（教育史料出版会，1991 年）

登戸研究所調査研究会『北原いづみさん追悼集　いづみさんの思いを受け継いで』（登戸研究所調査研究会，2019 年）

濱田武士「戦争遺産の保存と平和空間の生産」（歴史科学協議会編『歴史評論』2014 年８月号，校倉書房）

村上有慶「戦跡保存の取り組みと課題」（歴史科学協議会編『歴史評論』2014 年８月号，校倉書房）

山田雄一「明治大学キャンパス秩序回復をめぐって」

（機動隊員等を励ます会『はげまし』第364号，機動隊員等を励ます会，2005年）
Love & Peace K30 川崎市教育委員会，川崎市高津市民館『川崎市平和・人権学習30年の歩み―1985年～2014年の記録―』（Love & Peace K30 川崎市教育委員会，川崎市高津市民館，2017年）
渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦　―科学者たちの戦争』（吉川弘文館，2012年）
渡辺賢二「陸軍登戸研究所の実相をみつめて」（歴史科学協議会編『歴史評論』2014年8月号，校倉書房）

第11回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった　―登戸研究所掘り起こし運動30年のあゆみ―」展示資料一覧

本稿図表番号	資　料　名	所　蔵　者	資料番号
掲載無	『週刊現代』1959年8月30日号（複製）	登戸研究所資料館	C-122
掲載無	帝銀事件『甲斐捜査手記』別巻より（複製）	帝銀事件再審弁護団	－
掲載無	『歴史と人物』1980年10月号（中央公論社）	登戸研究所資料館	1983
掲載無	『歴史への招待』（NHK）	渡辺賢二氏	－
第4図	「生田神社由来の一つ」（複製）	明治大学	－
第6図	第一回登研会案内状	登戸研究所資料館	971
掲載無	第一回登研会の報告および登研会名簿呼びかけハガキ	登戸研究所資料館	970
第8図	石碑設置願	明治大学	－
第8図	石碑建立について（回答）	渡辺賢二氏	－
第9図	碑文案	渡辺賢二氏	－
第11図	碑案	渡辺賢二氏	－
掲載無	「登研会会報」（登研会，1988年4月20日）	渡辺賢二氏	－
掲載無	碑文アンケートハガキ（登研会，1988年）	渡辺賢二氏	－
掲載無	跡碑に関する書簡（『故北澤隆次追憶集』より）	登戸研究所資料館	270
掲載無	「登研会会報」（登研会，1989年5月25日）	渡辺賢二氏	－
掲載無	「登戸研究所跡碑」拓本（2013年稲田善樹氏作成）	登戸研究所資料館	－
第12図	現在の「登戸研究所跡碑」写真（2010年撮影）	登戸研究所資料館	－
掲載無	1987年度・1988年度中原平和教育学級募集チラシ	登戸研究所資料館	1950
第15図	登研会会員名簿	登戸研究所資料館	1948
第15図	元陸軍登戸研究所についてのアンケート（回答）	登戸研究所資料館	71
掲載無	1981年12月22日付『毎日新聞』切り抜き	登戸研究所資料館	1768
掲載無	『あゆたか』第35号（稲田郷土史会，1997年）	登戸研究所資料館	－
掲載無	松川仁『キノコ随想』	登戸研究所資料館	154
掲載無	伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』原稿	登戸研究所資料館	152
掲載無	和田一夫『昭和と共に生きて（わが人生の足跡）』	登戸研究所資料館	597
掲載無	川崎市教育委員会「近代遺跡（軍事に関する遺跡）詳細調査の実施について（依頼）」（1998年）	明治大学	－
掲載無	文化庁「近代遺跡詳細調査（陸軍第九技術研究所　明治大学生田校舎所在）にかかる協力依頼の送付について」（2003年）	明治大学	－
第18図	「旧陸軍登戸研究所建物等保存について（お願い）」（登研会，1999年）	渡辺賢二氏	－
第19図	「旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会」チラシ（1994年）	明治大学	－
掲載無	登戸研究所遺構保存要望書および署名（1999年）	明治大学	－

第 20 図	「登戸研究所資料館」展示候補資料リストと展示イメージ図（1999 年）	明治大学	−
掲載無	『明治大学新聞』（明治大学新聞学会，2000 年）	明治大学	−
第 22 図	「旧陸軍登戸研究所建物等保存について（お願い）」（登研会，2005 年）	登戸研究所資料館	587
掲載無	大島康弘「旧陸軍登戸研究所資料館完成にあたって」（2010 年）	明治大学	−